【守谷中学校区】

ギャップをステップに変える『交流教室』

中学校入学に伴うギャップを成長のステップに変えることをねらいとして，第１回目の交流教室を実施した。昨年度の実践の反省に基づき，異なる小学校同士を組み合わせた授業による小小連携，小学生と中学生の交流をより自主的な活動に発展することを方針として計画を下記のとおり立案，平成 27 年 11 月 17 日（火）に実施した。

時間帯	交流内容	指導者
2 校時	体育（小小連携）剣道入門	体育担当，小学校担当との TT
3 校時	音楽（小小連携）守谷中校歌，創作	音楽担当による授業
4 校時	英語（小小連携）中学校英語入門	英語科担当，ALT３名
給　食	小小連携による会食（弁当持参）	小学校担当
5 校時	歓迎レクリエーション大会（特活） ※中学校１年生による運営	中学校１年担当，小学校担当との TT
6 校時	部活動見学（生徒会誘導）	部活動顧問，生徒会担当

小小連携の授業では，小学生同士の交流がなされるよう協働的な学習を実施した。児童は学習を通して徐々に打ち解けていく様子がうかがわれた。英語科の授業では各小学校の ALT を加えた ALT３人体制によるティームティーチングを行い，小学校にはない文字を書く学習を体験し，中学校英語への理解を深めた。体育科の授業では，小学校では扱われていない武道（剣道）の導入を学習した。音楽科では，守谷中学校校歌を学習し入学式から歌えることを目指した。児童の感想からは，中学校の教師に対する親和感や学習内容への興味が高まった旨の記述が見られた。

中学校１年生による歓迎レクリエーション大会ではムカデ走の練習を行い，レースを実施した。小学生に中学生が丁寧に教え，グループ毎に楽しく練習する姿が見られた。児童の感想からは，ムカデ走の練習における中学生の接し方が優しく，中学校入学への不安が払拭された旨の記述が見られた。また中学校１年生からは，入学後の新入生に優しく接し，教えたいという発言や振り返りの記述が見られ，中学生にとっても心の教育の機会となった。

２回目は 1 月 29 日（金）に，中学校２年生のキャリア学習発表会，部活動体験による交流教室を実施した。

体育（剣道）

歓迎レクリエーション

守谷中学校区小中一貫英語教育の成果と課題

1　英語教育の動向と目標

グローバル化社会に対応するための教育として，「話す，聞く，読む，書く」という 4 技能を活用し，実践的な英語能力の育成が課題となっている。大学入試では既に実用英語検定や TOEIC などの検定試験が代替される方向性が打ち出されており，実用英語検定の結果には TOEIC 換算の点数も併記されるようになった。そこで，教育特区として英語活動を積み重ねている小学校の成果を中学校英語科が受け継ぎ，英語検定という資格で生徒に還元することを守谷中校区のねらいとした。また国が示す中学校 3 年生の英検 3 級取得率 50%を数値目標とした

2　大野小学校，黒内小学校における英語活動の概要

大野小学校，黒内小学校ともに英語活動を通して，音声言語による話す，聞くスキルを習得し，それを活用して会話ができることを目指した。低学年から中学年までは，ALT，担任による英語をシャワーのように浴びることで話す，聞く能力を習得する感覚重視の英語活動を行った。

高学年では更に ALT, 担任だけでなく児童同士が自分の考えや思いを会話で伝え合う協働的な学習活動を重点的に行った。さらに中学校英語科への接続として，フォニックスに取り組み，読む能力への移行を図った。

大野小学校では，英検ジュニアを５，６年生全員が受検し，英語の能力を児童が把握するとともに自信をもち，検定に対して積極的に取り組む動機付けとした。フォニックスは ALT 作成の教材を活用した。黒内小学校では，黒内祭（11 月 7 日）において，校区内の ALT を招集し，能動的な英語活動を行うことで日頃学習した英語力の深化を目指した。フォニックスは，ALT の歌及び DVD 教材を活用した。

また，11 月 17 日（火）に実施した第１回守谷中校区交流教室においては，校区内の ALT と中学校教員による「中学校英語入門」の授業を実施した。

3　守谷中学校における英語科教育の概要

電子黒板と自作デジタル教材「スーパーインプット」を全ての英語科授業で実施した。スーパーインプットは，リズムにのせて単語の発音を短時間に行う基礎トレーニングであり，これにより語彙を増やすことができた。スーパーインプットにより習得した語彙を基盤に，それを活用した実際場面を想定した会話学習を行った。

小学校の取組を受けて，守谷中学校では英語検定の受験を生徒に奨め指導した。その結果中学校３年生における英語検定３級以上を取得した割合は，国の目標である 50%を達成した。今後は小学校における実用英語検定５級への取り組み, Moriya English day を通した中学生の校内インタラクティブフォーラムの実施が課題となる。

また，実生活での英語活用として，3 学年は修学旅行先である奈良，京都で英会話を実践した。観光で訪れた外国人旅行客に折り鶴をお土産に差し上げ，帰国後にその国の風景に折り鶴を添えた写真を送信していただくよう，英語で依頼する活動を行った．その結果，多くの写真とお便りをメールでいただき，その成果をホームページで発信した。

守谷中学校区の道徳教育の取組

1　はじめに

８月の小中一貫中学校区部会で，中学校区の道徳教育の取組について研修した。昨年度守谷中学校の研究発表で取り組んだテーマ発問を主体として，守谷中学校区で更に研究を進めていくことをになった。守谷中学校で研究したことを部会で共有し，各校の道徳教育推進教師を中心に，次のような視点で具体的に取り組んでいくことになった。

○　作者の心情を追うような場面発問を中心とした展開ではなく，道徳的価値に迫る，資料の主題にかかわった発問を展開していく。

○　話合い活動を取り入れ気付きを深めさせる。話合いのスキルとして，うなずきや相づちなど入れながら共通点や相違点をお互いに指摘し合うなどする。○板書計画を重視する。

2　各校での取組

守谷中学校	大野小学校	黒内小学校
◎各教科，特別活動，部活動との関連させた道徳教育 ①　道徳資料「うるわしき伝統」～学校生活全体との関連～ ・各部活でのマナーやルールについて共有する時間をとった。後輩と先輩との関わり方，部活の在り方などを話し合い，部活動や学校生活の取り組み方をそれぞれ考えた。 ・みんなが過ごしやすい部活や学級の在り方を考え意見交換をした。全員が部長になったつもりで今後の取り組み方を考え意見を共有した。 ②　道徳資料「わたし，あなた，そしてみんな」～学級活動との関連～ ・阪神大震災でボランティアを行った少女の体験をもとに，本当のボランティアとは何かについて考えさせた。 ・道徳で考えたことや学んだことを継続するために学級活動を通して実体験をもたせた。具体的な活動としては次の通りである。 ア　新聞紙チャレンジ １６等分に破いた新聞紙をグループで協力して元の形に戻す活動。皆が協力して一人ひとりが仕事をしないとはかどらないことが理解できる。また，活躍する友達の姿を見て自分自身がどうするべきか気付く。 イ　エンジェルメッセージ 友達の良いところを振り返り，メッセージカードを渡す。具体的によい点を指摘しあうので自己肯定感が高まり認めあえる雰囲気を作ることができる。	◎研究授業の実践 ①　実践１「泣いた赤おに」 赤おにが，青おにの家を訪ね，青おにの張り紙を読んだときの気持ちを考えた後，「赤おにと青おには友達といえるのか。」と発問した。赤おにのためにたたかれて，赤おにのためを思っていなくなったのだから友達だという意見が多く出た。終末に友情についての考えを書いた。『信頼，友情』の価値について考えることができた児童もいたが，「かわいそう。」「雲にのって会いに行けばいい。」など資料の感想になり，自分との関わりで考えることができない児童もいた。 ②　実践２「オトちゃんルール」 中心発問で「『オトちゃんルール』は『あたりまえ』と受け止めていたのはどうしてか。」を考えた。同じ子供だから，友達だから，オトちゃんのルールではなくみんなのルールだから，などの意見があった。特別ではなく同じ仲間だからあたりまえという考えをもつ児童がほとんどだった。 【ワークシートから】 最後に，『思いやりとは』を考え，「相手ができないことを手伝う。」「困っていたら助けるが，できることは見守る。」「相手のことを思い助け合う。」という相手の気持ちも考えて行動することと捉える児童もいた。 しかし，優しい気持ちはあるが，「できるようにしてあげる。」という児童や教師から身近な学習や生活の場面を提示して自分の考えをもつことができた児童もいた。	◎研究授業の実践 ①　実践 主題名　ともに助け合って　２―(3) 友情･信頼･助け合い 資料名　「オトちゃんルール」 ア　ねらい 主人公やクラスメートの気持ちを考えることを通して，相手の気持ちや立場がそれぞれ異なることに気付かせ，必要なところを補って助け合おうとする心情を育てる。 イ　授業について 「テーマ発問」を生かすために，前半の場面発問につなげて，総合的な学習の時間の学年テーマである『共に生きる』の意味を改めて問うテーマ発問をした。 『共に生きる』とは，どういう意味なのでしょう。 テーマ発問をした後，次のような流れで話し合い活動を行った。 ○　ワークシートに自分の考えを書く。 ↓ ○　となりの人と話し合う。 ↓ ○　全体で話し合う。 児童の考え ・助け合うこと。 ・いっしょになかよく楽しく生活すること。 ・協力すること。 ・差別をしないこと。 ・仲間はずれにしないこと。

3　成果と課題

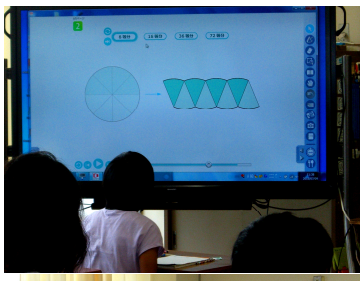
テーマ発問を行うことにより，教師自身が道徳の価値を深く考えることができた。児童生徒も発問に対して真剣に考え，自分の生活と結び付けて，自分の言葉で表現することができた。今後は，登場人物に共感するだけでなく，道徳的価値に迫るための発問や児童生徒の発言を生かして価値へとつなぐ発問など，教師の発問の工夫が必要である。実践を継続していき，主題を自分のこととして考えるための発問の工夫を研修していきたい。

守谷中学校区の情報教育の取組

守谷中学校区では，児童・生徒の理解を確かなものにするために，ＩＣＴ機器を活用した授業の確立を目指して取り組んだ。

１　電子黒板の活用

（１）デジタル教科書



デジタル教科書の導入によって，全ての教師がどの授業でも電子黒板を使って授業を進めることができるようになった。教師が積極的にデジタル教科書を活用することにより，ＩＣＴ機器利用に対するハードルが下がってきていることが実感される。

デジタル教科書は，教科書の拡大，アンダーライン等の書き込み，資料の提示などの場面で利用されている。特に，資料の提示では，静止画や動画，アニメーションなどを簡単に大画面で提示することができるため，社会，算数，理科では非常に有効に活用できた。６年生算数「円の求積」では，等積変形のアニメーションを提示することによって，児童が理解を深めることができた。

（２）電子黒板を使った児童・生徒のプレゼンテーション

電子黒板の有効な活用方法として，児童のプレゼンテーションでの活用があげられる。総合的な学習の時間などで，スタディーノートやパワーポイントで児童・生徒が作成したスライドを提示しながら，説明を行った。また，第２回小中交流教室では，中学生が電子黒板を使って，中学校生活のようすについてプレゼンテーションを行った。

（３）ユニバーサル・デザインとしての電子黒板の活用

小学校では，児童が登校してから，朝の活動が始まる前の荷物の片付けに時間がかかってしまうことが多い。片付けの苦手な児童や，活動にスムーズに入っていけない児童には，担任が一人一人かかわっていく必要がある。そこで，児童の登校時に，電子黒板にきちんと片付けられた荷物の写真や行動の流れを提示しておいた。児童は，それを見て確認しながら行動することができるようになった。

２　タブレットＰＣの活用

タブレットＰＣの特性（可搬性，ペン入力・操作，カメラ内蔵等）を生かした授業での活用を行ってきた。小学校低学年の児童でも，写真や動画を撮ってグループで意見交換をしたり，スタディーノートのデータベースに写真を入れた情報を登録して共有化したりすることができた。